

絵本に題名をつける

国語科 畠山 俊

1. はじめに

この授業を構想したきっかけはお茶の水女子大学附属学校園の教員が行う連携研究会での小学校の廣瀬修也教諭の授業実践にある。連携研究会はテーマ別に附属学校園の教員が集まって行う月1回の研究会である。私は「国語部会」（各学校園種の国語科教員が集まる。年度により部会名は変わることがある）に所属している。2017年度の連携研究会において附属小学校の廣瀬教諭が「ものがたりをよんで、もっとしりたいこと～『あいしているから』（1年）の実践～」という報告をなされた。教材は教科書『しょうがくせいのこくご 一年 下』（三省堂 2014.3.5 文科省検定済 2016.6.25 2版発行）掲載の「あいしているから」である。まず、その廣瀬教諭の授業の概要をまとめる（実践レポートより抜粋）。

学習の実際（全9時間）

- ① 授業者の読み聞かせを聞いて、初発の感想をノートに書く。
- ② 初発の感想を共有する。
- ③ 物語を読んで不思議に思ったことやもっと知りたいと思ったことを問いにする。
- ④～⑧ 話し合う問題を選び、話し合う。
- ⑨ モールくんに絵だよりを書く。

廣瀬教諭は「問題作り学習」に熱心に取り組んでおり、この教材もその一環として実践している。その「問題作り学習」となる④～⑧の段階のうちの1時間に「2つの『あいしているんだもん』の違いを考える」という時間があり、そのテーマに興味を抱いた。テーマの通り、作品の中に出てくるまったく同じ文「あいしているんだもん」が文脈によって意味を変えることを読み解く課題である。

連携研究会の後、いろいろと調べていく中で、この教材は次の絵本から取られていることがわかった。

『あいしているから』 マージョリー・ニューマン ぶん パトリック・ベンソン え
久山太市 やく 評論社 2003年10月10日初版発行

さらに調べていくと元々はイギリスで出版された絵本であり、今でも手に入ることがわかった。以下、こちらを簡便のために「英語版」とする。

『Mole and the Baby Bird』 by Marjorie Newman illustrated by Patrick Benson

First published in Great Britain in 2002 by Bloomsbury Publishing Plc

さっそく取り寄せて読んでみたところ、「あいしているんだもん」の2箇所は「英語版」でも「because he loved it.」というまったく同じ表現が2箇所で見られることがわかった。それとともに本の題名が大きく異なることに気づき、その2点を中心に高校での授業の教材とすることを構想しようと考えた。

2. 教材の位置付け

2.1 学習指導要領上の位置付け

新学習指導要領には次のような記述がある。

第3章「各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い」の1「指導計画作成上の配慮事項」○他教科等との関連（5）言語能力の向上を図る観点から、外国語科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。指導計画の作成に当たっては、他教科等との内容の系統性や関連性を考慮することが求められる。その際、国語科と同様、言語を直接の学習対象とする外国語科との連携は特に重要なものとなる。

＊『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編 平成30年7月』文部科学省 東洋館出版社

今回の指導要領では、他教科との連携、中でも同じ言語を学習対象とする外国語科との連携を行うように明示されている。例えば、日本語と英語という二つの言語を比較して考えることにより、生徒の言語感覚が磨かれることを国語科の中でも授業に取り入れていく必要がある。その方向性の一つを示すこともこの教材の位置付けとなる。

2.2 教育課程上の位置付け

今回の授業は学校設定科目「教養基礎『国語』Ⅱ」（高校2年生で週1時間履修）で行った。二学期の実践である。今回は平易な英文を扱うことと大まかな内容把握を前提として日本語によるいわば要約的な作業を行う。その作業を通して日本語と英語との言語のあり方の違いに目が向けばよいと考えている。さらに、タイトルを付ける際の国による考え方の違いなども感じることができるとよい。その上で、三学期の実践は現代の日本語ではなく、古文を用いて二言語（ないしは三言語）のあり方の違いをもう少し深く学ぶ。「教養基礎『国語』Ⅱ」について、並びにその三学期の実践については昨年度の報告（2018年度の本校研究紀要参照。本校HPにもリンクがある）もご覧いただきたい。

また、3学年の総合的な学習の時間「持続可能な社会の探究Ⅱ」（週1時間履修）の授業では英字新聞を作成するが、タイトルを付ける作業はそこでも生かせる。新聞記事のタイトルはその記事全体を印象的に表すものが求められる。今回の作業はその手助けとなるものでもある。「教養基礎『国語』Ⅱ」の二学期、三学期の実践は実は「持続可能な社会の探究Ⅱ」を意識して組み立てられたものでもある。それらの授業を総合して、生徒には言語の違いを意識することを学んで欲しいと考えている。

3. 単元の概要

(1) 単元の目標

- ① 日本語と英語の二言語に触れることにより、言語感覚を豊かにし、言語に対する関心を高める。《関心・意欲・態度》

- ② 英語を適確に理解し、文脈を意識しながら日本語に直す。そのうえで、題名を付ける。《読む能力》
- ③ イギリスと日本の文学作品の捉え方について題名を通じて考察する。《知識・理解》

(2) 単元の評価規準

《関心・意欲・態度》

- ① グループで協働して議論し、日英二言語の違いに目を向けようとしている。

《読む能力》

- ① 同じ文であっても文脈によって異なる意味になることを適確に捉えようとしている。
- ② 作品にふさわしい題名を考えようとしている。

《知識・理解》

- ① 題名の付け方からイギリスと日本の文化の違いを考えようとしている。

(3) 単元の指導計画（全2時間）

- 第1時 ・グループで「英語版」を読み、ふさわしい題名を考える。
・どうしてその題名になったのか、理由をまとめ、発表方法を話し合う。
- 第2時 ・自分たちのグループの付けた題名についてクラスでプレゼンする。
・気に入った題名に投票する。
・自己評価表を記入する。

4. 授業実践

形式は6～8名のグループでの活動とした。

4.1. 1時限め

「英語版」のカラーコピーを各グループに配布し、グループで読み、内容を把握させる。その際、「タイトル」の書いてある表紙部分は配布しない。ほとんどのグループは英語の得意な生徒が訳し聞かせていたが、中には1ページずつ交代に訳したり、みんなで訳を考えていったりするグループもあった。

次に、内容を踏まえて題名を付ける。題名は日本語でも英語でもよいとした。ワークシート（資料1）に沿って進める。全体を読んだら、内容を大まかにまとめて振り返る。話の内容にふさわしい題名の候補作をいくつか考え、その中からグループで話し合ってグループの題名を決定する。自分たちが親しんできた絵本の題名を挙げて、どのような傾向があるか分析して題名を考えるグループやあらすじを確認していることを踏まえて内容を象徴するような言葉を考えるグループもある。大きく分けるとその二つのやり方で題名を考えている。その選考の過程もワークシートに書き込んでいく。題名が決まっても、言葉を絵本らしく簡単にするにはどうしたらよいか、ひらがなや漢字の使い分けはどうかなど真剣に議論する様子であった。決定した題名はクラス全員に対してプレゼンするので、その方法や担当者などについても話し合わせた。

4.2. 2時限め

各グループで決めたタイトルについてプレゼンする。形式は自由。今年度は歌や踊りで表現したグループもあった。5分くらいまでにまとめるよう指示する。

全グループの発表後、いちばん題名にふさわしいと思われる題名を選び、ワークシートに記入する（資料2）。全員が書き込んだのを確認した後、「英語版」の表紙を掲げ、題名を確認させた。英語版に近い題名を提案したグループは盛り上がる。それが落ち着いたところで日本版の「あいしているから」の表紙をクラス全体に見せる。ここでも両者の違いに驚きの声が出る。頃合いを見計らって、どうして英語版と日本版のタイトルの付け方に違いが生じるか、考えさせ、意見を求める。様々な意見が出るが、最後にまとめとして私見を述べる。英語版のタイトルは登場人物を示している内容には関わらないが、日本語版はいちばん訴えたい内容を端的に示している。日本では国語の授業でも言葉の技術よりも内容の読解を重視する考え方が強いが、このようなことも「売れる」タイトルをどのように付けるかに関わっているかもしれない、というものだ。このことが文化の違いとまで言えるかは分からないが、これをきっかけにして生徒自身が考え深めてくれるとよいと考え、あえて投げかけている。

最後に自己評価表（資料2）を作成する。

後日、クラス毎に投票結果を集計し、提示する。獲得票数ベスト2の発表を行う。

2019年度のタイトル一覧

蘭組	票数	菊組	票数	梅組	票数
かわいい鳥には	12	だいすきだから	12	“好き”だから…	11
Because He Loved It	11	ふたりのしあわせ	11	モールと小さなおともだち	8
Shape Of Love		モグちゃん わかった!①～それぞれの生き方～		野生のおもちゃ	
ボクの愛とキミの幸せ		モグラくん、鳥さんを飼う		空をしらないトリ	
本当の愛情		僕はしあわせ。君はしあわせ?		ぼくのことり(大好きだから)	
幸せな贈り物		モグラと小鳥		ぼくのかわいいことりちゃん	

2位以下は順不同

5. 評価と今後の課題

今回は生徒の自己評価（資料2）の自由記述欄（・がひとり分）を元に、授業全体の評価と今後の課題を考えたい。

5.1 授業の方式について

今回の授業はグループ形式で行った。クラスを8人前後の5グループに分けた。題名を付ける際に協議を行ってほしいのでこの形式を取ることにしたが、もう少し人数を少なくした方が積極的に活動できると感じた。それについての記述には次のようなものがあった。基本的に生徒の書いたそのままを掲載している。()内は授業年度。

- ・自分たちで意見をだしあって進めていくのが楽しかったし、他の授業もこんな感じだったら忘れないで定着しそうだと思った。洋楽で同じような授業をやってみよう。題名を考えるのは意外と難しい。日本語と英語で同じ本を読み比べてみたい。(2019)
- ・とても考えさせられるような絵本で、日本語版を読んでみたいと思った。いつもよりも班のみんなと話せて、楽しい授業だった。簡単な絵本1つでおもしろい授業ができて、こういう授業を多くやりたい。(2019)

グループでの活動は普段授業に参加している意識が希薄な生徒にも参加意識を持たせることができることがわかる。また、教材を選ぶことで外国語科に限らず、幅広い教科との連携の可能性も探ることができそうである。

- ・先生たちも思考力を養うトレーニングをしてくれてるんだなと思いました。でも、やっぱりグループは苦手。発表するなら個人がいい。多数派の意見に流されざるをえないから。(2018)

グループ活動をするとしばしば感じるのであるが、クラスで10グループあると2つは非常によく機能し、活発な議論が行われる。6つは積極的なメンバーとそうでもないメンバーが混じり合いながら議論が進んでいく。そして、残りの2つは議論が脱線しがちでなおざりな結論に終わる。この三番目のようなグループに教員がどのように働きかけるかが今後重要になってくると考えられる。しかし、教員の側の経験も浅く、なかなかうまくいかない。そのグループばかりに張り付いてもいられない。今後、教員間で経験や方法を共有していき、方法を探っていきたい。さらに、ひとりの方が気楽で効率がいいと考える生徒も必ずと言っていいくらいに存在する。自由にグループ編成させると「ひとりでもいいですか」と聞いてくる生徒がいるのである。グループの様子を見ていると「声の大きい者に引きずられている」場面も見られるだけに無下にひとりを否定しにくい。「声の大きい者」を抑えて、議論を促す声掛けをするなどの方策は取れるだろうが、それで問題がすべて解決するわけではない。グループになってもグループ活動と感じない生徒が出てくる理由のひとつでもある。

5.2 授業の独創性について

- ・本は、題名がすでについているものをいつも読んでいたので、自分たちで題名をつけるのは新鮮で楽しかった。一方、あまりそのような経験がなかったので、本の伝えたいことがわかったとしても、題名の案をだすのは意外と思いつかず、苦労した。また、発表会でいろいろな班の題名をみて、みな伝えたいこと(=本の主題)は似ているものの、表現方法が英語だったり、ことわざのもじりだったり

と様々だったので面白かったです。(2019)

- ・前回から今回にかけて、英語の絵本を読んでタイトルを考えていて、今までやったことのない取り組みだったし、それぞれの班で様々な意見がありながらも、絵本から感じとるメッセージ性は共通していることが多くあったと思ってとても面白く感じました。内容に少し踏みこんで考えられたタイトルをつけた班もあれば、あえてとてもシンプルに登場人物を書くだけの班もありましたが、それぞれの班にそのタイトルにした理由があり、タイトルをつけた過程など様々だったけれどどの班も聞いていて面白くて興味深かったです。日本と外国の考え方や文化の違いは、このような子ども向け絵本1つをとってもタイトルの違い、カバーの有無など様々な相違点があることがわかりました。今、世界で注目されている文化間の大きな問題だけでなく、このような身近なことにも興味を持つことで視野が広がりそうだと思います。(2019)

評論等で段落分けをし、小見出しなどを付けることは国語の授業の定番であり、それと大筋では違わない。しかし、生徒の中では本全体となると意識が若干異なるようでもおもしろい。また、生徒が想像した以上に多種多様な題名を考えることにも驚かされた。生徒だけではなく、教員も楽しめた。さらに、自分たちの視点と他者の視点を比較して考察しているのもきちんとした活動があればこそであると感じた。

- ・とてもおもしろい授業でした。読んでいる時は、とても複雑な気持ちになりました。なぜなら、ペットとしてトリを飼うもぐらと、ペットを飼う私が重なったからです。私たちの班のつけた題名が本当の題名と少し似ていてうれしかったです。(2018)

このように自分に引き付けて考える生徒もいた。国語科では比較的このようなこともあるが、国語科の特徴のひとつであるから大切にしたい。掲載はしないが、自分の家族のあり方に引き付けて考えた生徒もおり、そのような読み方も引き出すのだと感じた。

5.3 タイトルを付けることについて

- ・絵本に題名をつけるのははじめてだったので、とても新鮮でした。たくさんのワードの中から数個のことばをえらんで題名をつけるのは難しかったです。本当の日本語訳は原本の直訳ではなく、日本独自の読みとき方で題名をつけているほどなと感じました。(2018)
- ・邦題を考える時に英語の「Mole and the Baby Bird」の和訳と同じような形になりがちで、なるべく結論に導かないようなテーマを考えるのが難しかった。日本版の題名を見ると、英題の印象とは異なり、とても奥が深く、重みのあるような感じがした。他の班の発表を聞くと、自分自身では考えられなかった視点で、考えられていて、興味深かった。(2018)

「独創性」とも関わるが、絵本に題名を付けるということ自体が興味深い学びであったようだ。そして、予想以上に「絵本」というハードルが高かったらしい。

- ・どのようにすれば簡単に内容のことがわかって、でもネタバレにならずに、手にとりやすい絵本のタイトルをつけることができるのかがわからず、苦戦した。絵本は、文章は少ないが、得られる情報量は思ったより多く、面白かった。(2018)
- ・絵本の題名を考えたことがなかったので、どのような点に考慮すべきか話し合いを通して考えることができて良かった。題名は読者がその本を手取るきっかけとなるものの1つなので、興味がわくようなもの、結論が述べられていないもの、シンプルなもので作品に合ったものである必要があり、考えることが難しかった。本当の題名を知って、日本語に訳すときに題名を変えたことは興味深いと思ったが、私は直訳で「モグラと小鳥」という題名にすることを好む。(2019)
- ・絵本のタイトルを決めるのは想像よりも単純ではなくて難しかった。読む対象を考えて使う言葉を選んだり、絵本の主題や印象的なシーンを踏まえてタイトルから何を伝えるかを考えたりと参考にする観点が多かった。普段はあまり取り組まないことなので時間もかかったけれど、楽しかったし、他の人の感性にも触れることができて印象深かったのでまたやってみたい。実際の日本語、英語両方のタイトルを見てみて、国の違いが如実に表されているなどと思った。(2019)
- ・今回の授業は絵本の題名をつけるというものだったが、絵本の内容が英語で書かれていたのは予想外だったので、面白かった。英語で書かれている絵本を実際に読む機会があまりなかったので、新鮮だった。個人的な感想だが、私は英語の文章は日本語に比べると何か少し淡々としている感じがした。日本語のほうが子供向けのやさしいニュアンスがでると思った。実際につけられた日本語の題名は「あいしているから」だったが、私は「Mole and the Baby Bird (=モグラと小鳥)」よりも私はやはり日本で考えられた題名のほうが好きだった。日本と英語圏の国のちがいが感じられて面白かった。(2019)

授業を構想した際には、ただ単に内容を把握し、題名を付けると考えていたが、実際の生徒の活動は予想を超えて「絵本」としてのタイトルのふさわしさを丁寧に考えている。そして、種明かしをした後、当たり前のことかもしれないが、英語版、日本版それぞれの題名を支持する声上がり、そのような観点から授業を深めることもできると感じた。このような授業では生徒の反応に臨機応変に対応することも大切であり、ALでも求められるスキルである。

- ・高校生ともなると、ただ表面的に物語の概要をタイトルにまとめるのではなく、その裏に隠されたメッセージ性まで汲み取って含みのあるタイトルにしようとする傾向があるように感じられた。印象に残ったのは、多くの班が平仮名でタイトルをつけていた点だ。平仮名というのは柔らかい印象や幼さを与えることができるだけでなく、一種の怖さも与えられるということを知った(勿論、怖さだけではないと思うが)。このように、ただの文字の羅列からその文章の内容をどこまでも想像できる点がタイトルの魅力であると考えた。ただ、つけ方によっては誤解や曲解を招くものとなりうるので、作文の題名なども含め、慎重につける必要

があるなど思った。翻訳家は天才だなと心から思った。(2019)

この記述などは文字の特性までも言及しているが、実はこのような感想は他にもあった。ひらがなは平易であるとの固定観念があった。しかし、確かにひらがなには恐ろしさを表現する力もある。このようなことはグループであれこれと議論していくから見出していくことができることなのではないだろうか。そして、今後の表現活動にもつながる部分がある。

5.4 日本語と英語の比較について

- ・日本語より英語の方が“sad” “glad” など簡潔に表現されているので、逆に想像で物語の幅が広がるなど感じた。題名をつけるにも、多くを語らないようにしたり、反対に見どころを簡潔にまとめたり、裏を読んで自分でストーリーを作ったり、おもしろかった。「翻訳」というものには当然意識が入っていることを実感し、興味をもった。(2018)
- ・班によって、タイトルに事実をもってきているところと主題からイメージしてつけているところの2つに大きく分かれていたことがおもしろいと思った。日本語では漢字とひらがながあるので、絵本ではひらがなが多くつかわれているという特徴があると思うけれど、英語にはアルファベットしかないので大人の本と絵本のタイトルの考え方、つけ方になにか違いがあるのか疑問に思った。タイトルだけではなく、カバーがあるなしなども違うことをして、絵本1冊を比べるだけでもいろいろな文化や価値観の違いを感じられるということが分かり、おもしろいと思った。(2019)
- ・いつもの授業より教養国語っぽくてたのしかったです。今回の各グループがつけたタイトルは英語のものもあれば日本語のものもありましたが、それぞれ英語でないと表現できないようなもの、日本語でないと表せなかったものもあり面白いと思いました。また、今回は内容的に「愛」とか「love」とかの表現が多かったけれど、この表現以外を使ったタイトルも見てみたいなと思いました。「かわいい鳥には」というのもありましたが、日本語に訳すときは日本のことわざを使うのも面白くてよかったですと思いました。でもやはり「あいしているから」のことばに含まれる意味は大きいので、これがタイトルになるのは納得しました。(2019)

このように言葉の違いや表記について関心を高めた生徒もいた。個人的には古文の時代からいわゆる「心情形容詞」は日本語の特色だと考えているので、そのような点にまで言及した記述があったことには驚かされた。「意識」とはどのようなものであり、言葉を翻訳するとはどのような行為なのかということの一端を経験したようである。

5.5 発表の形式について

- ・物語の本文だけ読んでタイトルをつけようとする、いつも以上に本文を深く読み、筆者が物語を通じて何を伝えたいのか、というところまで考えるため、ただ普通に物語を読んだときよりもより得られることが多く、とても面白かった。また、発表のスタイルが各グループで全く違っていて、タイトルを人に伝えるにも様々な表現の仕方があるということに気づくことができた。(2019)

・英語で本を読み、話し合うことで、日本の絵本を読むよりも様々な読み方ができたと思います。また、題名の付け方も、英語のグループもあれば日本語のもあったり、発表の仕方もおどったりうたったり劇にしたり様々でとても面白かった。(2019)

・題を予想するというのには1人1人それぞれ違う答えがあってとても面白いと思った。特に、モールくんの「愛」1つを表現するのにも、「Shape of Love」や「贈り物」など多くの表現が見られて言語の広がり、多様性のようなものやそれぞれの感性などを改めて認識できた。私達の班では工夫して発表ということでパプリカ歌と合わせて発表をした。それぞれの幸せという形や、音楽という印象に残りやすい、ある意味効果的な方法で独創的にできていい経験になった。(2019)

2019年度の授業ではあるクラスで様々な発表の形態が出現した。私自身も説明的な発表しか頭になかったので、初めに替え歌で発表したグループに接した時には驚き、そして感心した。するとそのクラスでは踊るグループやお笑い形式の対話型の発表なども続いた。発表の形式は指示したことはなく、まったくたまたまのことだが、それが同じクラスで起こったことも不思議なことである。しかし、この様子を見て、「表現」ということも含めて考えさせることもひとつのやり方であると感じた。今後授業をしていく際の参考になろう。

最後にたまたま2018年度にこの授業を2回にわたって参観した教員志望の学生の感想を掲載する。

絵本など物語の英語は口語に近く、文法的でないことが多いので大変だろうと思ったが、スラスラ読んでいて驚いた。読んでいる途中でも「愛故(ゆえ)だね」と、キーワード(ほぼ日本語タイトル)が出てきていたり、最終的なタイトルにも自分とことりとの幸せについてが主題だと考えるものが多く、内容をつかんでいてかつそれを表現していてすごいなと思った。ここまでは日本の小説の読み方とか、国語的な授業だが、最終的に翻訳や異文化の話にまでもって行ってまとめたのが、すごいなと思った。特に意識しないで考えさせ、あとからタネ明かしをすると、身構えないで取り組んだ分、実感としてわかりやすいので、翻訳や文学、ことばに興味を持ってもらえたのではないかと思う。

全体として楽しんで取り組んでいた生徒が多かったように見受けられた。その上で、日本語と英語の違い、絵本の題名としてのわかりやすさなどグループのメンバーから出された種々の課題を協働して解決していく様子に手ごたえを感じた。そして、「絵本を読み直してみたい」や「英語の絵本を読みたい」などの記述もあって、発展的な学びへの期待も持てるのではないかと感じた。

資料1

教養基礎「国語」Ⅱ ② グループワーク シート1

メンバー _____

○話のあらすじをまとめよう

○タイトルを考え、いくつか候補をあげてみよう

○タイトル選考過程を簡単にまとめよう

○決定したタイトル

*次回は各グループの代表者にタイトルと付けた理由をプレゼンしてもらいます
誰が、どのようにプレゼンするかを話し合っておいてください。

資料2

教養基礎「国語」Ⅱ ② グループワーク シート2

2年 組 番 氏名 _____

○一番いいと思ったグループのタイトル

今回の授業について、ふだんの授業も踏まえて、当てはまる番号を○で囲んでください。

5：大いに当てはまる 4：やや当てはまる 3：どちらともいえない

2：あまり当てはまらない 1：まったく当てはまらない

- | | | | | | |
|--------------------|---|---|---|---|---|
| ①言語の違いに興味があった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ②言語の違いにより興味があった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ③いつもの授業より積極的に取り組んだ | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ④作業は協力して行うことができた | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| ⑤文化の違いにより興味があった | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |

○今回の授業の感想を自由に書いてください

○一番いいと思ったグループのタイトル
おまじのしあわせ

今回の授業について、ふだんの授業も踏まえて、当てはまる番号を○で囲んでください。
 5: 大いに当てはまる 4: やや当てはまる 3: どちらともいえない
 2: あまり当てはまらな 1: まったく当てはまらな

- ① 言語の遣いに興味があった 5 4 **③** 2 1
- ② 言語の遣いにより興味がわいた **⑤** 4 3 2 1
- ③ いづもの授業より積極的に取り組んだ 5 **④** 3 2 1
- ④ 作業は協力して行うことができた **⑤** 4 3 2 1
- ⑤ 文化の遣いにより興味がわいた **⑤** 4 3 2 1

○今回の授業の感想を自由に書いてください

今回の絵本からは、今までの文化基本にあるものにあってはるものを感じた。相同と自分の価値観も生活には相違があり、例えれば、相同は愛していついと、憎んでいつかと、自分のスタイルを相手に押し付けている感覚と、我が国日本人が英語のネイティブに話しかけていくとき、私も日本語でもネイティブが強くて、私は英語を話さなくていいから、とかがいる感覚の対比。その国の文化背景を感ぜようとしていることを感じることがあった。

○一番いいと思ったグループのタイトル
本当の愛情

今回の授業について、ふだんの授業も踏まえて、当てはまる番号を○で囲んでください。
 5: 大いに当てはまる 4: やや当てはまる 3: どちらともいえない
 2: あまり当てはまらな 1: まったく当てはまらな

- ① 言語の遣いに興味があった 5 **④** 3 2
- ② 言語の遣いにより興味がわいた 5 **④** 3 2 1
- ③ いづもの授業より積極的に取り組んだ 5 **④** 3 2 1
- ④ 作業は協力して行うことができた **⑥** 4 3 2 1
- ⑤ 文化の遣いにより興味がわいた 5 **④** 3 2 1

○今回の授業の感想を自由に書いてください

英語のニュアンスと日本語のニュアンスの違いを絵本を通してある程度、どのような言葉が絵本と読み違えることにも気づくことが絵本のタイトルにするのであれば、本質をついてお話を共有して、各々の内容をタイトルにした方が日本語に合っていると感じました。

日本語は敬語と大切にすることが大切だと感じました。1. イギリス版の "Mile and the Baby Bird" というタイトルがタイトルに載りました。絵本を通して文化の違い、異文化理解に向けて考えることができて楽しい授業でした。

自己評価集計 (2018)

2学年全体	5	4	3	2	1
1	21	58	24	8	0
2	34	58	17	3	0
3	8	40	44	14	3
4	28	40	34	6	1
5	42	43	24	1	1
6	42	49	16	3	1

自己評価集計 (2019)

2学年全体	5	4	3	2	1
1	27	58	16	7	1
2	39	50	17	3	0
3	29	51	25	2	0
4	62	44	2	0	0
5	47	44	13	4	1

資料2の自己評価シートは2019年度のもの。2018年度は項目が若干異なるが、1～5までは2019年度と同じである。